

あらゆる妨げを乗り越えて共に歩む尚綱

教授 東 義 也

1. ブゼル校長を仙台から去らしてしまった尚綱

2020年は尚綱女学校の初代校長アニー・S・ブゼルの遠野赴任100年にあたる。それまで尚綱と地域社会のために27年間、まさにPassion with Missionを体現してきたブゼル校長だった。しかし、1920年12月にアメリカから戻ってきた時、尚綱に彼女の居場所はなかった。ブゼルを校長の座から引きずり下ろし、遠野へある意味追放してしまった当時の尚綱はどんな様子だったのだろうか。

過去の資料を洗い出すと内村達三郎と吉川一水の名前が浮かび上がってくる。彼らは「学識、雄弁、人気を備えた二人の日本人男性教員」¹⁾だった。内村とはあの内村鑑三の実弟。英文科主任で5ヶ国語を話す人物だったとある。また、吉川は聖書を教えていた。尚綱では1919年から、毎週日曜日講堂で礼拝が行われるようになり、「説教は主として主事吉川一水が担当し、霊的で迫力ある説教で多くの若い魂を信仰へと導いた」²⁾とある。おそらく二人とも熱心なキリスト教信者であり、指導者であったに違いない。しかし、キリスト教の精神を土台とする人間教育を高く掲げてきた尚綱の歴史において、これは負の部分であると言わざるをえない。尚綱学をzoomで受講後、ある学生がチャット（ミニッツペーパー）で「ブゼル先生をよく思わなかった人はキリスト教精神に反するのでは？」と書いていた。当然の感想であろう。いくつかの引き金になった出来事があったにせよ、校長としての任務を果たし続けてきた彼女を妬み、追放を画策した人間のいたことを尚綱は深く受け止め、謝罪しなければならないだろう。

ブゼルの心中は計り知れない。しかし、彼女はこれについて全く弁明しないまま静かに次の任地遠野へ向かった。そして、早速幼稚園の開設に着手し、幼稚園と教会を通して遠野の人々に仕えていったのである。

仙台を去らなければならなかったブゼルの姿は、創世記に登場するアブラハムの子イサクに重ねて見ることができる。イサクも神から受けていた祝福を妬まれ、攻められる。そして、本来定住する権利があったにもかかわらず、反逆せず、柔和にその土地から自ら退いていったからである。³⁾

2. 国家主義的教育に吞まれていった尚綱

ブゼル校長が遠野へ退く3年前の1917（大正6）年11月、尚綱では創立25年記念式が行われている。その式次第を見て私は唖然とした。讚美歌、聖書朗読、祈祷のあと教育勅語奉読と君が代斉唱とあったからである。ブゼルも2代目校長になるジェッシューもいた時代である。これについては、尚綱の最後の宣教師ロバートL.ステイブンスが以下のように書いている。

「尚綱はこれまでも、どんな国策にも忠誠な学校として知られてきた。宣教師たちもそれを認めてきた。彼女たちは日本の国民に好意を持ち、国家の首長（宗教としての神道の長ではなく）としての天皇を尊敬していた。…1912年、明治天皇大葬の時、皇居のある東京に向かって拝礼することさえ、宣教師たちが問題と感ずることはなかった。国体、国策への忠誠はキリスト教の団体にはなじまない、といった気持ちを宣教師たちは見せなかつ

たし、自分たちの行動と神道を結びつけもしなかった。」⁴⁾

戦前戦中のことはわれわれの想像を絶するもので、とやかく批判できる立場ではないのかもしれない。しかし、1939（昭和14）年9月からの尚綱は、月曜の礼拝に先立って国旗敬礼と宮城遙拝を行い、翌1940（昭和15）年4月からは校門を出入りする際、校舎内に設置された天皇・皇后の写真を祀る奉安庫のある方角に敬礼することを、生徒・教職員に課していたのは事実である。

天皇陛下の人柄に親しみを持ったり人格者として尊敬するのは良いとしても、その人を「現人神」として讃えたり拝礼することは、キリスト教になじまないばかりか全く反する行為であろう。⁵⁾ 当時、日本のキリスト教主義のどの学校も、また、教会でさえも苦渋を舐めたとはいえ、尚綱は尚綱としてこの罪を神の前に告白しなければならないと私は思う。

結局、戦時中の全体主義・国家主義の教育政策のもと、尚綱が創立当初から教育の柱にしてきた聖書、英語、音楽の授業はことごとく短縮・廃止されていった。そして、宣教師が一人もいなくなった後、「1943、44、45年度の入学者は敗戦まで尚綱がキリスト教主義の学校であることを知らずに過ごした」⁶⁾ という信じがたい記述がある。歴史から学び、このようなことが二度と繰り返されないことを私は望む者である。

3. 新型コロナウイルス感染症の世界的拡大とこれからの尚綱

さて、2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、当初予定していた学事は変更から変更の連続で、いまだに学生たちをキャンパスに迎え入れることができないでいる。職員はその対応に追われ、教員はzoomやcampusmate-Jを駆使し、遠隔授業の準備と実施に追われっぱなしである。いつまで続くのか出口の見えないコロナ禍のなかで、仕事をさせていただいているだけでも感謝しなければならないけれども、私自身精神的に病みそうな、限界に近づいているような状況である。

しかし、人類の長い歴史を振り返れば、このような感染症による被害は、何回も繰り返されてきたし、聖書にも神が疫病によって家畜や人々を撃つ記事は決して少なくない。疫学・医学が進歩してきたとはいえ、世界で344,000人以上の死者（5月26日現在）を出してしまう世界的なこの大災厄について、われわれはどう考えればよいのだろうか。私は、尚綱が今日まで大事にしてきたキリスト教の精神を継承し、共に前進することだと思う。そのためには、聖書に啓示された神の言葉に静かに耳を傾け、聞き従う決意をすることである。最近教えられた聖書の言葉を紹介して終わりたい。

「わたしが天を閉じ、雨が降らなくなるとき、あるいはわたしがいなごに大地を食い荒らすよう命じるとき、あるいはわたしの民に疫病を送り込むとき、もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。」歴代誌下7章13、14節

これは、ソロモンがエルサレムに神殿と王宮を完成させた時の神の言葉である。どんな偉業を成し遂げたとしても、神への信仰（信頼）と祈りのないところに祝福はない。

「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、す

べての人を一つにしてください。」ヨハネによる福音書 17 章 20、21 節 a

イエスは十字架にかかる前夜、父なる神にこのように祈られた。「彼らの言葉によってわたしを信じる人々」とは、21 世紀の今を生きるわれわれのことではないか。人の間を引き裂こうとするあらゆる妨げを乗り越えて、私たちが一つになるようにととりなしの祈りをされたイエス・キリストは今も生きておられる。この方から目を離さないで共に前進したいのである。

註

- (1) 佐々木公明『遠野での「物語」－ブゼル先生最終章』2019 年、p.6
- (2) 尚綱女学院 100 年史編纂委員会『尚綱女学院 100 年史』尚綱女学院、2002 年、p.157
- (3) 聖書の創世記 26 章 12 節から 25 節
- (4) ロバート L. スティブンス『根付いた花－メリー・D・ジェッシーと尚綱女学院』キリスト新聞社、2003 年、p.149
- (5) 出エジプト記 20 章 3－5 節
- (6) 前掲書 (2)、p.255

尚綱に咲いた花

准教授 土 田 定 克

尚綱に勤めて十三年、この学び舎に初めて花が咲いた。味気ない白い廊下に、新緑萌え出ずる多目的広場に、赤や黄や桃色の花が咲いた。春の日を浴びて輝く姿は眩しくて、とても正視できたものではない。

それは 2020 年 3 月 18 日、コロナを避けて急遽学内で短く挙げた卒業式の後。きれいに着飾って晴れの日を迎えた教え子たちは口を揃えて言う。「最後の日を、通り慣れた場所で過ごせてよかったよね」と。そんな健気な花姫たちが教えてくれたこと――。

種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい (マタイ 13: 3～9)。

まず「種」とはそもそも福音書の言葉を指し、種が落ちる所は人の「心の状態」を示す点を断っておかなければならない (マタイ 13: 18～23 参照)。つまりここで言うところの「良い土地」とは、素直に聞く心や感謝して受け入れる心、つまり「謙虚な心」を指す。

そのような心のありかを、教え子たちは旅立つ日に見せてくれた。彼女たちは尚綱という母校と友を大事に思っていた。そして今ここに共にいられることに喜びを見出していた。思えば